21世紀探偵局

アバンダンデロの快機械

荒巻義雄

角川書店

バンダンデロの快機械

荒巻義雄

アバンダンデロの快機械

昭和56年3月31日　初版発行

著　者　荒巻義雄

発行者　角川春樹

発行所　株式会社　角川書店

東京都千代田区富士見2-13-3　郵便番号 102

電話（東京）(265)7111〈大代表〉振替 東京3-195208

印刷・大日本印刷　製本・鈴木製本

落丁・乱丁本はお取替えいたします

©Printed in Japan

0093-872305-0946(0)

21世紀探偵局

アバンダンデロの快機械

イラスト　平塚重雄

デザイン　田端克雄

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.

目次

未来拳銃〝南部改〟　七
鋼（はがね）の猿　五一
黒い犯罪スター――続鋼の猿――　八九
マンホール帝国　一二九
火のバプテスマ――続マンホール帝国――　一六三
アバンダンデロの快機械　二〇三
あとがきに代えて　二六七

三年前まで、おれは特殊部隊にいた。戦死して、砂漠の土に化した同僚もいた。

――第三次大戦は、中近東で戦われたのだ。

だが、なんのために……。

おれはいま、それについて論じようとは思わない。ただ彼らが犬死したと、思いたくはないのだ。

しかし、あの砂漠における死は、乾いていた。死者は脱水し、風化していく……。

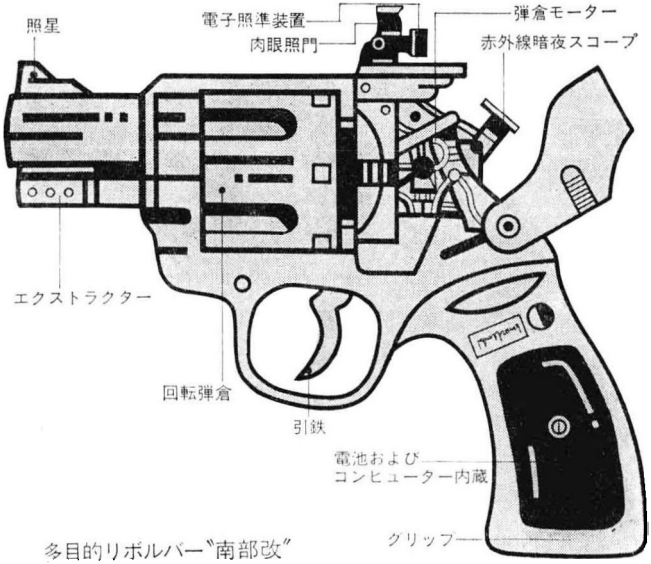
いまも忘れてはいない。あたかもサイレント映画のようだった戦術用中性子爆弾の閃光……。全ての生き物が焼きつくされ、棺桶と化して狂い走る戦車軍団……。

おれにとっての過去は、乾上がった時間だ。

おれは、あの戦場で何かを喪失した。だがその代り何かを得たのだ。

そして現在――二〇一×年

未来拳銃〝南部改〟



多目的リボルバー"南部改"

●S & W M29との比較

	南　部　改	S & W M29
口　　径	44Mag-S	44Mag
全　　長	202mm	302mm
銃　身　長	55mm	165mm
重　　量	1050g	1350g
装　弾　数	6発	6発
ライフリング	5条左回り	5条右回り
初　　速	512m／秒	448m／秒
グ リ ッ プ	オーバーサイズ	オーバーサイズ

●その他の特長

〈発射機構〉無薬莢弾雷管使用。弾倉電動式赤外線暗夜スコープ風速風向および下際集準用コンピューター特殊弾(ガス・麻痺)用発射装置〈アタッチメント〉ロケット弾用発射筒(元込め式)

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.

1

奴のクーペは、埠頭の波除けに激突していた。
ボンネットがぱっくり口をあけ、車の臓物が白い蒸気をあげていた。座席に血溜りができていた。
おれは、ようやく獲物を追いつめたと思った。
あたりは、東京湾の工業団地予定地だ。人影の途絶えた埋立地を、鷗の群が舞っている。
「森安ッ、姿を現わせ」
と、おれは怒鳴る。
野郎は、車を捨てて逃げたようだ。死に瀕した巨象が、静かに死ねる墓場を求めるみたいに……。
突然、疳高い女の悲鳴があがる。おれの頭上で……
「誰かッ、誰か救けてッ」
建築中のビルの上からだ。
おれは車の陰に身を伏せる。屋上を仰ぐ。夏空は真蒼で眩しかった。
奴と女の姿がシルエットでみえた。二つの影は、影絵芝居みたいに揉みあっていた。
不意に、悲鳴が途絶えた。黙らせようと、奴は女を殴りつけたらしい。

ふたたび、あたりは静まりかえった。おれは、舗装の照り返しを暑いと思った。
軀体工事のおわったビルの背後に、入道雲が光っていた。
車の陰から立ちあがったとき、おれの影は短かった。緩っくりと空地のほうへ歩みだす。
森安の頭が、屋上のパラペットに見え隠れする。
森安は、ベレッタM22新型短機銃で武装しているはずだ。
おれは、死角までの距離を目測する。一気にビルの壁にとりつく腹だ。
「来るなッ」
喚き立てる森安の声がとどく。
奴は虚勢を張っていた。死の淵に追いつめられ、気が立っているのだ。
だが、彼の巨体はいま確実に、弱りはじめている。
ダッ――ダダッ
森安は撃ってきた。脅えているのだ。予想以上に確かな照準だ。NATOサブマシン標準弾九ミリが、おれの足元の融けた舗装のアスファルトに食い込む。
森安の短機銃は、P・ベレッタ社開発M12SMGを改良したマシーンである。初速四五〇M秒、発射速度五〇〇～五五〇発／分。重量三七三〇グラム、このタイプの機銃としては驚異的な軽さだ。一九八〇年以降、NATO軍の制式短機銃として採用されている。
おれは地を蹴り、ダッシュした。
死角に転がり込む寸前に一発打ち返した。
森安は本能に支配された。頭がパラペットの陰に隠れる。

おれは、その間隙をついて外壁にとりつき、工事用の仮設桟橋を一気に駆け昇る。おれは野猿だった。

緩っくり、最後の外壁を屋上に攀じのぼっていく。正面の塔屋が、おれの姿を森安の視野から隠した。

足音は、特殊部隊員用のラバーシューズに吸収された。おれの血が、身体のどこかで騒ぐ。汗ばんだ手が、ほどよい重量をつたえる多目的四四口径を握りしめていた。グリップは、オーバーサイズ仕様である。銃の名は、〝南部改〟七七七型。特殊鋼を用い、軽量化に成功した日本の名銃である。

弾倉には、必殺の銃弾四四マグナムスーパー六発を装填、至近距離におけるストッピングパワーには定評がある。

撃鉄装備はなく、電気雷管付無薬莢弾を使用。

グリップ内に照準用電子装置を内蔵、高性能の命中率を誇り、さらに赤外線利用の暗夜射撃も可能だ。

「森安ッ」

塔屋の陰から跳びだした瞬後、おれは腰を落とす。銃を構え、発射時の強烈な反動に備える。

巨漢の森安は、女を楯にしていた。

野郎はM22を人質の顎に突きつけ、緩っくり横へ移動しはじめる。

白っぽく粉を吹いたような屋上の床に、点々と鮮血の跡が滲んでいた。

「まだ撃つなッ」

奴は、窶れた顔をおれに向けて叫んだ。多量の出血のためか、表情が蒼醒めている。

「どっちみち、あんたは死ぬんだ。さ、人質を解放しろ」
おれは〝南部改〟の、電子照準器の中心に、森安の頭部を捉えた。
いつでも撃つことはできる。電気雷管で銃弾がとび出す〝南部改〟の引き金は、スウィッチと同じだ。
奴も、そのことを知っている。初速五一二M秒でとびだすマグナムスーパー弾が、一秒の五十分の一足らずで、自分の頭を吹っとばすことを、よく理解していた。
「ま、待ってくれ。冥土の土産によォ、こいつと一発済ませてからだ」
森安は、顔色を土色に褪化させて叫んだ。
既に人質の女は、下肢を曝されている。ホックを外された短いプリーツのスカートが、もがくたびに次第にずれ下っていく。ついにそれが床に落ちた。女は、森安に引きずられ、よろめきながら、輪を描いたそれを跨いだ。もうひとつの、レース地の下着の輪は、まだ膝頭にまつわっている。
綺麗な脚だった。銀色のメタルシームのストッキングが、頭上から降り注ぐ強い日射しをきらめかせていた。
ストッキングの末端は、真白な太腿に食い込んだガーターだった。
突然、M22を投げ捨てると、森安はもがく女の首を締めはじめる。
「あんたからも言ってやってくれ。穏和しくしたほうがいいってな……」
と森安は、狂った眼でおれに言った。
「わかった」
おれは〝南部改〟を擬したまま、女に言ってやった。

「お嬢さん。奴に抗らわんほうがいい」
女は恨めしそうにおれを眼差す。
「頭の機械がいかれちまったんだ。暴れると、あんたの首の骨が折れるかもしれないよ」
女はおれの一言で、抵抗をやめた。
森安は女に命じて、屋上のトップライトの上に両手をつかせた。そして人質の背後に立つとシャベルのような手を拡げ、女の胸の隆起を鷲づかみにした。
女の股間の叢がちらちらする。森安の野郎は、動物のように独りで咆哮した。
突然女は顔を歪めた。膝頭の輪が、床におちる。悲痛の眼差しが、おれに注がれ、救いを求めた。
森安は、女を背後からつかまえ、楯にしていた。奴の腰が機械のように動く。顎を女の肩に預け、酷薄の眉に恍惚の皺を寄せた。
やがて森安の眼は、開かれたまま凝固した……。
おれは歩みを進める。女にむかって、
「もう、いいんだ。奴は死んでるぜ」
低く声をかけた。
女は、反射的にとび退くと、真っ直ぐおれの方へ走ってきた。走りながら、背後に顔を振り向かせ、あたかもメッカを礼拝する回教徒のように伏した死骸を目に入れた。
おれはそのとき、体液に塗れた女の繁みをみた。
泣き崩れるだろうと思った。だが、女の表情は仮面だった。嗚咽をはじめたのは、おれが抱き止めたときだった。

「いい娘だ。泣くな。さあ、早く服を着ろ」
まだ若い女だ。我に還って、床の上から下着とスカートを拾いあげる。
おれは、ポケットからメモ用カセットをとり出す。スウィッチを入れ、書類作成用の報告を録音する。
——西暦二〇一×年八月×日、零時三〇分、標的一〇三五三三番の死亡を確認。
場所、東京湾十一番工業団地×号……

2

——酔うほどに、森安に犯られた女は陰気になった。
女の名は桓武東漢子といった。
おれは、浴びるほど飲み、安物の煙草を吸いつづけた。
新宿の場末の店だった。界隈は堕落の巣だ。いかがわしさが大手を振って闊歩している。
ここの店主は、おれの戦友だ。特殊部隊学校の同期生だ。
手榴弾の暴発で片脚を失って除隊、この店を買ったのだ。
「奥が空いたぜ」
と、おれに知らせた。
カーテンが開き、髪の乱れを気にした年増と、若い男の二人連れが、中から出てきた。
「いや、いいんだ……」
とおれは首を振った。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.